1 ルネサンスとヒューマニズム

▶ pp.86～88

自由意志 ―ピコ＝デッラ＝ミランドラ

おお，アダムよ，汝には一定した住所をも固定した相貌（そうぼう）をも，特殊の機能をも与えなかったが，これは汝が，汝の意思と判断とに従って，いかなる住所をも，いかなる相貌をも，いかなる機能をも，思いのままに占め，かつ，もつことができるためである。他のすべての被造物の性格が限られており，指定された法則のうちに束縛されているのに，ひとり汝のみは何らの制限によっても束縛されていないが，これは汝が，汝の自由にまかされた意思に従って，汝の性格を形成することができるためである。

汝を世界の中心においたのも，そこから汝が世界のうちにあるどのようなものをも容易に観察することができるためである。汝を天上のものとしても，地上のものとしても，また死すべきものとしても，不死なるものとしても作らなかったが，これはどんな形態に関しても，汝がみずからの選択と名誉とをもって，汝みずからの形成者，創造者となることができるためである。汝は最下級の被造物である禽獣（きんじゅう）に堕落することもありうるが，しかし汝の魂の決断によって，神的な高級のものに再生することもできるのである。

（ピコ＝デッラ＝ミランドラ，植田敏郎訳『人間の尊厳についての演説』創文社）

2 宗教改革と人間の内面

▶ pp.89～91

信仰によってのみ義とされる ―ルター

きみはまたここで，信仰がすべての掟（おきて）を満たし，ほかのすべての行いなくして人を義とすることが，どんな理由で当然だと認められるかを，知るだろう。なぜなら，きみはここで，信仰のみが，「ただ一人の神をあがめなさい」と命ずる第一の戒（いまし）めを満たすことを知るからである。たとえきみがかかとにいたるまでまったく善行のみであったとしても，それでも義とされるのではなく，神に名誉（めいよ）を帰するのでもなく，したがって，第一の戒めを満たすことにはならない。そのわけは，神がまことにそうでありたもうように，真理とすべての善を神に帰するのでなければ，神をあがめることはできないからである。しかし，これをするのはいかなる善行でもなく，ただ心のうちの信仰のみである。したがって信仰だけが人間の義であり，あらゆる掟の実現である。

（ルター，塩谷饒訳『キリスト者の自由』「世界の名著 23」中央公論社）

予定説 ―カルヴァン

私たちは，予定を，神の永遠の定めとよびます。この定めに従って，神は，何が，各自に起きるべきかを決定します。なぜなら，すべての人は同じ状態に創造されていないからです。ある人には永遠の生命に予定され，ある人には永遠の滅亡（めつぼう）に予定されているからです。このように各自は，どちらかの目的に向かって創造されていますから，私たちは，各自は生命に予定されているとか，あるいは，滅亡に予定されているとかいいます。神はこの予定を，ただ，個個の人に証（しょう）しただけでなく，良い例を，アブラハムの全子孫に示しました。それ故（ゆえ），私たちは，聖書が明瞭（めいりょう）に示すことを強調しなければなりません。すなわち，神は，永遠，不変の聖旨（せいし）により，救いに招こうとする人と，滅びによって呪（のろ）おうとする人を定めたと強調しなければなりません。

（カルヴァン，渡辺信夫訳『キリスト教綱要』新教出版社）